



Title	クライスト『ペンテジレーア』とそのギリシャ的素材について
Author(s)	奥田, 延子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1977, 10, p. 17-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47725
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

クライスト『ペンテジレーア』と

そのギリシヤ的素材について

奥田延子

ペンテジレーア¹とは、トロイア戦争でアキレウスと戦い、敢えなくも敗れた美しいアマゾーンの女王である。伝説が語るペンテジレーアは、ヘクトールの死後、トロイア王プリアモスを支援するため、アマゾン軍を率いてトロイアにやって来る。勇敢な女王は多くのギリシヤの将を討ち取るが、遂にアキレウスとの一騎討ちで、右胸を槍で刺されて倒れた。ところがアキレウスは、瀕死の女王の兜を脱がせて顔を覗き込んだ時、その美しさに心を動かされて彼女の死を嘆き、殺したことを悔やんだ、と伝えられている。

一八〇八年、クライスト(Heinrich von Kleist)はこの伝説をもとにして『悲劇・ペンテジレーア』(Penthesilea. Ein Trauerspiel)を書く²。しかし、彼がこの時行なった大胆な改竄は、例えばゲーテが古代ギリシヤを扱う時のように、素材へ接近しようとするのではなくて、むしろ素材の方を自分に引き寄せ、クライスト化しようとする、という彼の詩作の特質を顕著に表わしている。クライストがこの作品に故意にアナクロニズムを持ち込み、古代的でないことを意図した、という事実や³、「本当に、私の最も内奥の本質がそこにあるのです、〔……〕つまり、私の魂のすべての汚辱とすべての栄光が、共にここににあるのです⁴」という彼自身の言葉は、この作品がいかに詩人の内面と密接

に結びついた魂の表白であるかを示しているのである。しかし、どれほど換骨奪胎が施されていようとも、やはりクライストの構想は、最初この伝説上の女王から出発したことに変わりはない。彼をしてこの素材を選ばせたものは何か、そして、彼の魂はこの素材とどのように切り結んでいるのか、われわれはその詩的変形の過程、またその理由、意味を問うことによって、トーマス・マンに「素材に精神の火を点ずる」と評された、クライストの創造の秘密の一端を探ろうと思うのである。

一 ベンテジレーア

第一場、トロイア近くの戦場で、オデュッセウスはアンティロコスに向かい、開口一番、トロイア戦争に介入してきたアマゾーンの奇妙な振舞を語る。トロイア支援に来たはずの彼女達は、今、どちらの味方にもつかず、ギリシャ、トロイア両軍を敵に回して壮絶な戦いを繰り広げているのである。これは「復讐の女神が続べるようになって以来、地上で未だ行なわれたことのないような戦闘」(三二六)であり、「私の知る限り、自然には、ただ力とその抗力のみが存在し、第三のものはない。〔……〕とところがここでは、両者に対して憎悪を燃やす敵が現われたのだ」(同前)、そして今や両軍は、ヘレネー略奪をひとまずおいて、共通の敵に協力してあたねばならなくなったよつだ、と彼は語る。オデュッセウスは、彼の世界観からは全く理解できぬ存在としてアマゾーンをとらえる。それは、ホメーロスの古代ギリシャ世界が、見知らぬ異質の世界と最初に接触した驚きに他ならない。ここでは、アマゾーンが、一義的明快さに支配された男性的、アポロ的ギリシャ世界に対する、暗く非合理的な、混沌の女性的世界の象徴となつて、

既存の秩序を打ち壊そうとし始めている。そしてこの異質の世界を代表するのが、ペンテジレーアであった。

実はアマゾーンの目的は、トロイア戦争そのものではなく、女人国が存続するため毎年行なわねばならない花婿獲得の戦いでギリシャ軍を捕虜にし、故郷テミスキューラへ連れ帰ることにあった。このような花婿獲得戦争のモチーフをここに導入したのはクライストの創作であるが、これによって素材のギリシャ伝説から、男性のみの世界であるトロイア戦争が後退し、素材は遙かにエロスの色彩を帯びる。しかも、ペンテジレーアの場合、エロスは彼女の自我の覚醒と同義語であった。女戦士達は、軍神アレースが自分の身代わりとして彼女達の前に差し向ける男と戦い、彼を討ち負かした時に初めて彼を夫とすることが許されるのであって、彼女達が自ら選んだ男を追うことは禁じられていた。この掟は、神々の意志を己れの意志とする、という前提において、人間のすべての行為の根源に神々の御手の働きを見る古代ギリシャ的運命観に属している。ところが、女王は同盟を請いに彼女の陣営に來たアクレウスを一目見て恋に落ち、それからは他の武将には目もくれず、一途に彼のみを追う。アマゾーンの掟にそむくことは、神々への反抗であり、やがてはギリシャ世界の本質基盤からの乖離とならずにはおかない。掟に従う限り神々と一体である人間は、無意識の調和の中に生きているが、エロスとしての自我が神々に逆らって内面に台頭してきた時、女王はたちまち分裂の悩みを体験しなければならなかった。彼女の必死の追撃にもかかわらず、めざす相手はたびたび彼女の手をすり抜ける。武器を持つ手を萎えさせるのが自分の恋の感情であることを予感ししても、彼女にはまだ、神々から離れていく自分の心の動きが理解できない。「いかなる乳房も与えられなかった私のどこに、私を打ち倒すような感情が住んでいるのだろう」（三四三）。そして「魂が私に反抗し、逆らうのです」（三四四）と叫ぶ女王は、今まで彼女が盲目的に従ってきた、人間の心を支配する神々と、自己の魂との葛藤の中にいる。

最後の一騎討ちで、遂に女王はアキレウスの槍に突かれ、落馬する。この時、彼女に止めを刺そうと近づいた英雄は、なぜか立ち止まってしまふ。

ところがこの不可解な男は、死の影のように青ざめさえて立ち尽くしているのです、

神々よ！と彼は叫びます、

何という瀕死の眼差しが私を捕えたことか！

彼は馬から急いで飛び降り、

〔……〕

すっかり色青ざめてしまった人に、つかつかと近づき、

彼女の上へかがみこんで、ペンテジレアー！と叫びます、

そして彼女を腕にかかえて抱き上げ、

彼の行なつた行為を大声で呪い、

嘆きながら彼女を生き返らせようと呼ぶのです。(三五九)

クライストが、瀕死の女王に恋するアキレウスという伝説のモチーフをここでかなり忠実に再現していることは、クライストと伝説の接点として重要である。なぜなら、クライストがおそらく神話のこの部分に最も強く心を引かれ、この瞬間を軸として彼のペンテジレアー像が形成されていったであろうと思われるからである。しかしこの第八場は接点であると同時に分岐点でもある。女王は女戦士達に助けられて辛うじてその場を逃れ、アキレウスも彼女の後を追う。クライストは女王を神々の定めた死から救い、エロスとしての自我に発展の可能性を与え、またアキレウスも

神話の世界から解放されて、クライストによって新しく創造されることになる。

今や動かしたい敗北を悟った女王は、絶望のどん底で、初めて自ら心の中を覗き込む。「私が彼に剣を振るう時、私は一体何をしようというのだろうか？ 彼を冥界へ投げ込もうというのか？ 永遠の神々よ、私はただもう、この胸に彼を抱き寄せたいだけなのに！」（三六一）女王はこうして自我の要求と掟との矛盾を知り、魂の底から真実を叫び出すのである。アマゾーンの一人、プロトエは、女王を今や支配している運命は、もはや神々ではなく、彼女自身の感情であることを感じ取る。「それが彼女の運命なのです！ あなたには、鉄の帯は引きちぎれないように見えるでしょう、どうですか？ とところがごらんない、彼女ならおそらく切つてしまおうでしょう、しかし、彼女も、あなたが侮る感情を断ち切ることはできないのです。彼女の中で何が支配しているか、それは彼女だけが知っています。感じる胸はすべて謎なのです。」（三六四―五）またプロトエは、神々を失い、戦いにも敗れて、破滅の淵に臨んでいる女王の拠り所はもはや自我しかないことを、「（組んである）石の一つ一つが落ちそうだからこそ、立っている丸天井」（三六七）にたとえる。外界が悉く女王を破滅に陥れようと迫る時でも、彼女は自己の内面に唯一の望みを託して、新しい神を築き上げようとするのである。

絶望に耐えきれない女王は失神するが、その間にアキレウスが追いついて彼女を捕虜にする。しかし、プロトエの頼みで、女王が息を吹き返した時彼女を刺激しないため、アキレウスは自分が彼女の捕虜となったと偽る。女王は念願が叶ったことを喜び、アキレウスと恋のひとときを送りながら、問われるままにアマゾン国や自分の生いたちを語る。愛の成就した喜びは女王の心の鎧を溶かしてしまい、彼女は逆襲してきた臣下に救われても、恋人と引き離されたことを恨んで神官長の怒りをかい、遂にすべてから見放されてしまう。再度の挑戦を請うアキレウスの使者が彼女

の許に着いたのは、丁度この時であった。女王は彼の真意を量りかねて、自分の心からの愛の告白も彼に通じず、誠が踏みにじられたと思い、激怒する。アキレウスは、わざと敗れて彼女に従っていくための偽りの挑戦のつもりであったが、恋人の裏切りに狂った女王によって、無防備の彼は惨たらしく殺されてしまう。女王は半ば狂乱状態の中で犬と共に恋人の白い胸に噛みつき、肉を引き裂いたのである。この場面は、エウリーピデースの『バックスの信女』でペンテウスが狂った母親等に八つ裂きにされる場面の影響を受けているであろうが、ディオニューソスによって心を乱された母親とはちがって、女王はすでに神々を離れているため、この残酷な行為も、絶対を求める彼女のエロスとしての自我のなせるわざであった。彼女は我に帰った時に言う。あまりの愛の強さ故に、口づけのつもりで恋人を噛んでしまったのだ、たいいていの女は、恋人を愛するあまり食べてしまえそうだ、というだけで、それで満足してしまふが、「恋人よ、ところで私はそんなことはしませんでした、これをごらんなさい、私があなたの首にしがみついた時、私はそれを実際に一語一語、言葉通りにしたのです、私はみかけほど気が狂ってはいなかったのです。」(四二六) 恋人に噛みつき、引き裂く、狂気とも見える存在状況の中であって、遂に彼女は愛の究極を手にしたのである。これまで苦悩や失望と戦い続けてきた魂は、ここで一瞬、絶対の領域に突入し、「自分の死の時がすっかり熟している」(四二二) 至福を感じる。しかしこの絶対の領域は、所詮「脆き世界」(同前)の住人である女王には、一瞬の体験でしかなく、現実の領域では、愛の究極も恋人を殺すという過ちとなり、罪となったことを知らねばならなかった。彼女は自己の過ちの責任を誇り高く負って、自ら死を遂げる。

というのも、今私は私の胸の中へ

縦坑のように下りていき、そして粗金のように冷たい

私の破滅させる感情を堀り起こすのです。

この粗金を私は悲嘆の炎の中で

堅い鋼に精錬し、それから後悔という

熱くくいこむ毒にたっぷり浸して、

それを希望という永遠の鉄敷きに持っていていき、

一ふりの短剣に鋭く研ぎ上げます。

そしてこの短剣に、今私の胸を委ねるのです、

こう！こう！こう！こう！そしてもう一度！——さあ、これでよい。

(彼女は倒れて死ぬ) (四二七)

自我の究極を窮めた女王は、死においてすら一切の他者の介入を排除し、運命の女神の鉄も必要とはせずに、自己の感情を短剣として己が胸に突き立てる、という、神々に対する最大のヒュブリスを犯す。この死は、オイディプースのように、運命に定められたままに罪を犯し、しかもその負い目に苦しみつつも、自ら命を絶たず、神が死の時を定めるまで生に甘んじる受動性とは、全く対照的である。神々に反逆し、自我に身を委ねたヒュブリスの結果の死は、しかし罪業のままに終わるのではない。感情の短剣は、悲嘆と後悔をくぐり抜けた後、「希望という永遠の鉄敷き」によつて仕上げられる。ヒュブリスが再び無辜に返ることを確信しつつ、女王は死に赴くのである。クライストは、このような人間存在の過程を、あやつり人形の比喻を用いて次のように言っている。

あやつり人形の踊りの優雅さは、人形使いによつて人形が自然に持つ重心を巧みにあやつられ、重力からも自由に、

重心以外の力を知ることなく無意識に踊っていることから生まれる。それに比べ、人間が踊る時は、魂という意識的に気取って体を動かす力が動きの重心と別に働き、それによって全体の調和が失われ、優雅さは損われる。これは人間が認識の木の実を食べて以来の宿命であり、もはや彼は、人形や動物のような無意識という罪なき状態にはもどれない。唯一つ、彼が再び人形の優美さを獲得する道は、彼の認識、意識を無限を突き抜けて貫き、遂にその反対側に出してしまうことである。そこは、魂を持たぬ人形と同じ美しさが再び生まれる無意識の領域であると同時に、無限の意識の領域、すなわち神の領域でもある。つまり人間は、無垢の状態にもどるためには、もう一度認識の木の実を食べなければならぬ。それは、すなわち世界史の最終章なのである。

ペンテジレーアは、神々に支配されているギリシヤ的な調和の領域から、自我意識の台頭による内面の分裂という悲劇的存在領域を耐えぬき、自我をどこまでも追求し、感情に身を委ねて、最後に自我を神とする絶対領域、最初と同じ、分裂を知らぬ無垢の領域に達するのである。感情の短剣による死は、彼女がすでに、このような自我を神とする領域に達している証左である。彼女の死は、無限の罪業と破滅を通り抜けた瞬間の、究極の成就であり、完成であった。

二 アキレウス

ペンテジレーアが神話世界からの乖離を体験したように、アキレウスもまた、彼の所属する神々の世界から一步を踏み出さねばならなかった。しかし、女王と彼との相違は、彼が完全には自我の領域に没入することができなかった

ことにあった。そしてここに、彼の悲劇の核心が存在するのである。

『イーリアス』に描かれたアキレウスは、いわば古代ギリシャ的英雄の典型であった。この神々の寵児は、短い一生の代わりに、数限りない栄光をトロイアの戦場で獲得する運命に定められていた。それ故、恥と名誉が、彼の生における唯一絶対の価値基準であった。このようなホメーロスの英雄世界は、男性的な昼の光に満ちあふれていて、英雄達は可視の世界に目を向けて立っており、彼等の内面も何ら秘密めいた暗闇ではなく、そこにも彼等を動かす神々の姿を見ていたのである。このような世界に住む英雄にとって、エロスはどんな意味を持ち得たであろうか。トロイア戦争勃発の原因となったヘレネーの事件、アキレウスが戦場を退いてまで怒った、彼の女奴隷ブリーセイイスの強奪、これらは決して女性に対する恋や嫉妬が、彼等ホメーロスの人間の上に占めていた役割の大きさを示すものではなく、それどころか、彼女等の夫や主人が、自分の被った不名誉や屈辱をせひとも雪がずにはおくまいとする正義の論理が、いかにこの世界に浸透していたかを表わしている。決して女への女々しい未練が、アキレウスに戦場を棄てさせたのではなかったのである。ところが、ペンテジレーア伝説は、敵方の女戦士の美しさに恋心をそそられ、自己の行為を悔いて嘆くアキレウスの姿を伝える。討ち取った敵の死を悼み、後悔の涙を流す感情は、すでに恥と名誉を生るの原理とする英雄にとっては、重大な危機である。ペンテジレーア伝説は、栄光に彩られたアキレウスの生涯が一度体験した破綻であり、この時、その間隙から、彼の知らないエロスの領域が微かに閃き出たのである。しかし神々は、女王の死によって容赦なく直ちにこの光を覆い隠し、彼はすぐまた怒号鳴り響く戦乱の渦に巻き込まれる。エロスの暗い領域は、ここではまだ光の世界に従属していたのである。

では、クライストにおいては、アキレウスはどのように描かれているであろうか。すでに第一場で見たように、こ

こでは女性的な暗い力が、男性的な明るい世界の中に侵入し始めていた。オデュッセウスがこの不可解な戦いを一時やめようとするのに対し、アキレウスが女王の執拗な攻撃に腹を立てて、自分一人でも女王と戦うことはやめないぞ、と叫ぶ時、それはまるで、目に見えぬ糸が彼を没落の深淵へ引き寄せていくかのようなのである。しかしこの時、まだ彼は依然としてホメーロスの英雄であった。生意気に武器を振り回す女王を侮り、彼女を征服したら屍を辱しめてやる、とさへ言う。ところが、瀕死の女王の眼差しに魅せられた彼はたちまち恋に落ち、「剣を打ち捨て、盾を投げ出し、鎧を胸からむしり取って」(三六〇)女王の後を追う。伝説とクライストの分岐点は、まさにここからである。一人の女への愛のために鎧を脱ぎ捨てることは、神々から武勲の誉れにのみ生きる定めを与えられた彼の存在理由を、根底から覆してしまわないであろうか。ホメーロスの英雄は、今、女への愛を貫いて、己れの生に一つの汚点を残すことに甘んじるか、それとも愛を捨てるか、の選択に迫られる。神話は、神々の世界の秩序を守るため、モイラによって彼の愛の対象を奪い、その感情の発展を断ち切ったが、クライストは女王を運命から救い、神々の秩序の網目を破って、アキレウスにも神話が決して与えない問題に直面させた。名譽と栄光に支配されたホメーロスの世界に住む人間において、もしその存在基盤が揺らぐことがあるとすれば、何によってであろうか。クライストは、それをエロスに見た。彼は、アキレウスにエロスという自我の覚醒を体験させることによって、この英雄をもまた、神々の世界から離脱させたのである。

東の間の愛の告白の後、再び女王と引き離されたアキレウスは、やがて女王に従っていく決心をし、その手段として、自分が敗れるつもりで戦いを挑む。このような英雄にあるまじき行為を、他の将らは当然理解できなかった。

ディオメデース 気でも狂ったのか！

アキレウス この男は、俺の言うことを聞こうともしない！

奴は、生まれてから今まで、

世の中で、自分の青い目でまだ見たことのないものは、

頭の中でも考えることができないのだ。(四〇六)

人間の心の中までが神々の光で照らされた世界に住んでいるディオメーデースとはちがつて、今、アキレウスは、不可視の新しい領域が自己の内に生まれつつあることを感じている。そこへ来たオデュッセウスも、ダルダニア人の城（トロイアの城）を前にして、ヘレネー戦争を子供の遊びみたいに放り出すつもりか、と詰問する。アキレウスが感じ始めたものを、この「道学先生」（四〇六）で、権謀術数にのみ長けた智将、従って、英雄の狭量な一面をも代表するオデュッセウスが理解するはずはなかった。ここでも、「感じる胸はずべて謎」なのである。彼等とアキレウスの間には今やはっきりと断絶が生じ、二つの世界の立つ異なった基盤が現われて来たのである。アキレウスは、オデュッセウスの言葉の中に、ようやくそれを認めた。

アキレウス 奴は、ダルダニア人の城、と言ったな。

オデュッセウス 何だと？

アキレウス 何だ？

オデュッセウス お前が何か言ったように思うが。

アキレウス 俺が？

オデュッセウス お前だ！

アキレウス 俺はこう言ったんだ、

奴は、ダルダニア人の城、と言ったなど。

オデュッセウス ああ、そうだとも！

俺は憑かれた男のように尋ねたのだ、

ダルダニア人の城を前にしたヘレネー戦争のすべては

朝の夢の様に忘れられているのか、とな。

アキレウス (彼に近寄りながら)

もしダルダニア人の城が、ラーエルテースの子よ、

陥没するとしても、おわかりだろう、そして青みがかった湖が

その代わりにできるとしても、

もし老いた漁夫が月明かりに

小舟をその城の風見にもやうとしても、

もしプリアモスの宮殿で、

かわかますが治め、かわうそか鼠の番が

ヘレネーの床で抱き合おうとも、

そうなったところで、俺には今と全く変わりはないだろう。

オデュッセウス ステュクスに誓って！ こいつは全く本気で言っているのだ、テューデウスの子よ！

アキレウス ステュクスに誓って！ レルネーの沼に誓って！ ハーデースに誓って！

地上界と冥界のすべてに、

そしてそれ以外のあらゆる第三の場所に誓って、俺は本気だ、

俺はディアーナの神殿を見たいのだ！（四〇八—九）

アキレウスは、一時放心状態にあった。外界の声は、遙か彼方から聞こえるこだまのようにしか彼の耳には届かず、彼はただ内心の声に耳を傾けていたのである。オデュッセウスが問いを繰り返した時、初めて彼は我に帰り、今、彼の魂は、己れの奥底から直接に声を発するのである。トロイアの城がたとえ湖底に沈もうと、自分に何の関わりがあらう、と。この真実の声は、オデュッセウスといえども認めぬわけにはいかなかった。アキレウスは今、はっきりとトロイアよりも女王の愛を選ぶことを宣言したのである。

しかし実は、彼のこの挑戦こそ、彼の自我の領域の要請であると共に、彼がまだ脱し切れなかったホメーロスの領域からの発想でもあった。そしてまさにこれが、二人の致命的な誤解の原因となったのである。彼は、女王が今もなお、「彼女にとっては神聖な、妄想じみたもの」（四〇六）、すなわち、夫となる男をまず倒さねばならぬ、というアマゾーンの掟にとらわれていると考えていて、もはや彼女の愛が、あらゆる条件を問題にしないほど強いものになっていることを知らなかった。彼は、英雄が恥と名誉を重んずるように、彼女もまた女王としての体面に拘泥していると信じた。彼は女王を過小評価し、女王は彼を過大に評価していたのである。女王のような、全か無かの精神は、彼には無縁であった。このナイーヴな英雄は、女王に従っていくといつても、ほんの一、二カ月の間だから、その間に重大な戦況の変化もあるまい、と言う。エロスの底無しの深みを、彼はまだ覗き込んだだけで、測り尽くすことはできな

ったのである。二つの領域に片方ずつ足を置きながら、どちらの側にも入れなかったアキレウスは、英雄の世界からも離れ、女王の愛をも得られず、破滅するしかない。墮落した英雄は、その強さも、神の庇護も失い、鹿のように弱々しく殺されねばならなかったのである。

三 クライストとペンテジレーア

ペンテジレーアとアキレウスの体験した、内なる神々の崩壊と自我の覚醒、それは実は近代人の苦悩の始まりであり、いや、誰よりもクライスト自身の苦悩の本源に他ならなかったと言えよう。ここにこの作品のアナクロニズムの本質がある。かつて古代ギリシャ世界では、あやつり人形のように神々のあやつるままに身を任せ、外界との調和の中に休らっていた自我は、神々の喪失と共に、外界とも分離していく。昔、神々が実在していた人間の内面に、人間は今や己れの魂を見るだけであり、神々という全との一体感を失って、人間は唯一人、自分自身とのみ向き合っている孤独な存在である。しかも、神々が去った「脆き世界」は、仮象や迷妄、偶然や誤解に満ちている。神々という道標を失った人間は、常に無数の別れ道に遭遇しなければならぬ。「いかに生くべきか」という人間存在の根本的な問いに対して、彼は、唯一つの拠り所である自我の声に耳を傾け、それを信頼して生きるしかない。しかし、このような自我への沈潜は、内なる深みへ絶えず彼をひきずりこみ、人間をますます孤独にせずにはおかない。ペンテジレーアとアキレウスの情熱が、いかに互いをひき寄せようとしても、この孤独な魂同士を現世で完全に結びつける絆はどこにもなかった。愛し合う二つの魂が交わす言葉すら、互いを理解させることはできなかったのである。クライストも

また、このような底知れぬ己れの深淵に悩む、「言い表わしがたい人間」であり、他の人々には永久に彼の「感じる胸は謎」のままであった。このような孤独の深き淵より、ホメーロスに描かれた輝かしいアキレウスを遙かにおおぎ見た時、彼は、自分と世紀の被る不幸を一層強く感じざるを得なかったであろう。この英雄は、自我認識の呪いも知らず、神々に定められた運命のままに生き、「いかに生くべきか」の迷いも、自己の行為の責任も、自責の苦しみも知らず、それ故にあれほど美しく、ナイーヴに、栄光と幸福を享受できるのである。ヘーリオスのように、燦然と金色の巻毛をなびかせて彼の頭上を駆けるアキレウスは、クライストにとって、ペンテジレーアの嘆きと同じく、「高すぎる」(三六六)存在であった。しかし、ペンテジレーアは、この栄光の像を、エロスによって最後には我がものとすることができた。神話の中のペンテジレーアが彼の心を捕えた理由も、ここにある。この英雄の前に敗れ去った無数の敵将の中で、彼女だけが彼の心を後悔に苦しめた。彼女のエロスのデモニツシユな力のみが、アキレウスの猛々しい心を突き崩すことができたのである。クライストは、このエロスが、彼の心をトロイア戦争という彼の唯一の存在目的からそらす力を持っていることを感じた。これまで運命に従って無意識に生きてきた生は、自我と神々の矛盾によって、初めて自己の存在を意識し、その正当性を問い、自我に向かい合わねばならない。美少年が、自分の振舞の美しさを意識したとたん、二度と最初の美しい動作を再現できなかつたように、このギリシャの美しい英雄も、エロスの隠微な香りが鼻先をかすめた時、アキレウスらしからぬ柔弱な態度を見せる。クライストのアキレウスは、エロスという禁断の木の実を食べ、栄光を失い、他との存在の隔絶に悩み、遂に破滅に至る、近代人と同様の宿命を与えられたのである。このように見てくる時、クライストがペンテジレーアにひかれたのは、彼女が、ギリシャ神話の世界にありながらアキレウスの英雄性を脅かす、反秩序的性質を持っていることを感じ取ったからではなかつ

たか。クライストは、アキレウスの鋼の心をも溶かした彼女の死の魅力の中に、何よりも、あらゆる障壁を押し流し、破壊し、止まる所を知らぬ、恐るべきデーモンの姿を見たにちがいない。捕えた者を、没落の奈落へひきずりこむエロスの激しさを秘めたペンテジレーアを、クライストは、秩序に対する混沌と破壊の力として、ギリシャの神々の世界に対峙させる。ペンテジレーアこそは、カント危機以来、悟性への信頼を失い、その結果、破壊の危険を知りつつも、自我という逃れられぬデーモンに従い、感情にのみ従おうとしたクライストにとって、その自我の究極を探る最適の素材であったにちがいない。アダムとエヴァが認識の木の実を食べて樂園を追われたように、アキレウスとペンテジレーアも、自我の認識によって神々の園から転落する。しかし、脆き世界に押しつぶされたアキレウスに対して、ペンテジレーアには樂園が再来した。クライストにとっては、キリスト教の教えるように、樂園を喪失した人間は、地上で罪を悔い改めることによって神の許に帰ることが許されるのではなく、むしろ罪を無限に追求することによって、無限の究極を突き抜けた時に、罪が無辜に変化する領域が開けるのであった。ここでの新しい神は自我である。自我が罪となり、負い目となって人間を苦しめるのなら、卑屈な悔いよりも、むしろ苦悩を悩みぬき、罪を突き詰めて、破壊の壁に激突する方を彼は選ぶとする。破壊の極に達しなければ、罪はいつまでも罪のままではかないのだから。われわれは、このような人間の典型を、ペンテジレーアに見るのである。

しかし、このように破壊の栄光に輝き、世界史の最終章に行きついたペンテジレーアも、所詮、クライストの内なる世界の中で創造された詩的形姿でしかない。有限の現実世界に住む生身の詩人は、絶対の究極を望みながら、現実の脆さにただ失望のみを味わわねばならなかった。従って、彼が遂に己れの現世での使命と悟った詩作において、不滅の桂冠を勝ち取ろうとした巨人的自負には、その裏に必然的に、氷のような救いようのない孤独感、絶望感があり

ついていたのである。神をも蔑して自我の絶対を勝ち得ようとするヒュプリスが必ず受けねばならぬ栄光の苦しみ、このプロメーテウスの運命を負った詩人は、ギリシヤの神々の調和と節度の世界ではなく、ディオニューソスの乱舞のうちに絶対の領域へなだれこむ、「アナクロニズム」をしか、創り上げ得なかったと言えるであろう。

テキスト

Heinrich von Kleist: *Penthesilea. Ein Trauerspiel. In: Sämtliche Werke und Briefe.* Hrgg. von Helmut Sembdner.

Carl Hanser Verlag, München 1952; 5, vermehrte und revidierte Aufl. 1970, Bd. 1. テキストからの引用のページは本文中

中()で示した。テキスト以外のこの全集からの引用は注に入れ、*Werke*と略す。

注

(1) ギリシヤ名の日本語表記については、ペンテジレーアをドイツ語読みにした他は、すべて次によった。

高津春繁 『ギリシヤ・ローマ神話辞典』 一九七二年 岩波書店

(2) 全集の注で编者ゼムプトナーは、クライストの採用した伝説は、異説(初めアキレウスが女王に殺され、後に蘇った彼が今度は女王を殺した、というもの。クライストの場合は、女王がアキレウスを殺した後、自殺して終わっている)の方である、と言っているが、単なる筋の上での類似はこの場合問題ではなく、あくまで瀕死の女王に魅せられたアキレウスのモチーフが重要であり、従って、敢えてここではゼムプトナー説をとらない。

- (3) Helmut Sembdner: *Heinrich von Kleists Lebensspuren. Dokumente und Berichte der Zeitgenossen*. Bremen 1957, S. 160f.
- (4) Werke, Bd. 2, S. 797.
- (5) Thomas Mann: *Amphitryon. Eine Wiedereroberung*. In: Walter Müller-Seidel (Hrsg.): *Heinrich von Kleist*. Darmstadt 1973, S. 52.
- (6) Werke, Bd. 2, S. 338-345. „Über das Marionettentheater“.
- (7) 『あやつり人形芝居について』との関係は、B. v. Wiese や J. Kunz も言及している。Vgl. Benno von Wiese: *Die deutsche Tragödie von Lessing bis Hebbel*. Hamburg 1948; 8. Aufl. 1973. Josef Kunz: *Die Thematik der Daseinsstufen in Kleists dichterischem Werk*. In: Walter Müller-Seidel (Hrsg.): *Heinrich von Kleist*. Darmstadt 1973.
- (8) このようなアキレウスの悲劇的な二面性は、愛の語らいの場で彼が見せた優しい姿と、アマゾンへの逆襲が伝えられた時の荒々しい様子の対照が、女王を驚かせたことにも表われている。三八三―四ページ、及び三九八ページ参照。
- (9) Werke, Bd. 2, S. 729-730.
- (10) 『あやつり人形芝居について』参照。
- (11) Sembdner: a. a. O. S. 161.

(大学院学生)